

# 入試と幼児



品川不二郎

## 一、入試の意味

幼児にとって入試がどんな意味をもっているだろうか。いいかえれば幼児が入試をどのように考え、どのように感じているだろうか。そしてそれが親や教師などのおとなの見方とどのようによくいちがっているだろうか。

こんな話がある。幼稚園生活もいよいよ終りが近づいて将来の進学を夢みた両親が、あるとき子どもを東大につれていって見学させた。そして、赤門を指し示しながら、「これが僕が大きくなってからはいる学校だよ」と言ってきたのである。ところが二、三か月していよいよ楽しい新入学となって親が子どもを小学校へつれて行ったところ、「僕のはいる学校は赤いごもんのある学校だ」といってだだをこねて親を困らせたというのである。

おとなの考える入試はとかく子どもの将来の先の先まで考えが

である。ところが幼児には将来というような時間の観念がないから、そこに大きいいちがいが起るのである。

時間にかぎらず、入試には面接とかテストとか、いろいろ新しい経験が待ちうけているわけであるから、それを予想しておとなはいろいろの「準備教育」をする。それが子どもたちに了解しえないために、大きい不安を抱かせることになりやすい。

幼児の入試を考える場合、いったいどこに考え方の基準をおくべきなのであろうか。入試の準備はいかにあるべきなのであろうか。この問題を次に「人格」と「知能」の二つのテーマについて考察してみたい。

## 二、人格の調和的発達

幼児保育の一般的なねらいと入試のねらいは一つなのであろうか、別のものであろうか。つまり入試のために特別の準備が必要かと

うかという問題を考えてみる必要がある。上は大学から下は幼稚園まで、入試準備の時代に突入しかけたかの観を呈する最近の父兄の熱の入れ方には、少々批判を要するものがある。そしてそのような父兄の要望をいれて幼稚園までが入試のための「つけ刃」的な準備教育を強いられるとすれば、基本的な幼児保育のあり方が曲げられるおそれもある。

基本的な保育がまげられると、そのしわよせは結局「幼児」そのものに向けられるわけで、おとなは被害者でないから、ついうっかりしがちであるが、幼児教育の立場からは重視せざるをえないのである。というのは、子どもの人格の調和的な発達が阻害されるからである。次に一つの実例からのべてみよう。

ある幼稚園から、何人か教育相談につれてこられた子どもたちにも、似たような問題が共通していることに気づいた。それは、青白くて神経質で、引込思案で、おとな子どももみたいで、そしてノイロ―ゼ・タイプで、とくに幼稚園が楽しくないということである。

そのうちのA子ちゃんは、土曜日になると憂うつそうな顔をしているので、お母さんが聞いてみると、「土曜日の次は日曜でしょ、日曜の次は月曜でしょ、そしたら作文もつかなければならないでしょ」と答えたというのである。つまり幼稚園で作文の宿題が出るために、子どもがゆううつになっていたのであるが、そのお母さんは、入試のためならばやむをえないと思っていた。

その受持の先生は両親の要望を上回る熱心さ(?)で、「私の受持った子は入試に合格するだけでなく、はいつてから優等生だ」と、いつもお母さんたちに自慢するそうである。

幼児期にとって大切なものは、感覚、運動の訓練であり、情緒の成熟であり、社会性の伸展である。これら人格の基礎形成を怠って抽象的な知的教育を先走りすると、弱い土台の上に家を建てるような危険性のあることを忘れてはならない。

この原則を犯した入試準備をしていると、子どもの人格発達の調和が破れるから、子どもの現在の精神的健康のためにも、将来の発達のためにも好ましくない結果を招くことになる。たとえば、気が弱いために知っていることも答えられないとか、緊張しすぎて動作が円滑にできないとか、考えすぎてかえってとんちんかんな答をしたりということになるのである。

赤い頬に輝やく目、生き生きとした自然の態度で卒直に動作したり答えたりできることを入試にとって大切なことであり、そのためには、人格の全分野が調和的に発達していることを絶対必要である。急場の間に合せや、つけ刃では入試の準備にならないので、最もよい入試準備は、調和的の人格の発展であるということを確認したい。

そのためには、入試準備が単に幼稚園だけでおこなわれるものでなく、家庭でも大いに心がける必要があるという父兄の啓蒙が必

要となる。たとえば世話をやきすぎたり、心配しすぎたり、過保護的な育て方が依存心のつよい不器用な子や神経質な弱い子を作ることとか、愛情が溢れすぎて溺愛では気が弱くなり社会性ができないとか、わがまま放題では自己統制ができず人と協調できないとか、弟妹との不公平な扱いは情緒の成熟を妨害するとか、厳格すぎて期待が高すぎると、明るさが不足し、のびのびした性格や積極的な態度が作られない。

このような家庭における親のしつけ方のポイントをおさえて、この面での留意点を逃さないように心がけることが大切な準備であることを確認していくことが家庭と幼稚園の協力上必要であろう。

### 三、知 能

入試が近づくとも幼児をつれて教育相談所を訪れるお母さんが増加する。そして中にはあちこちの相談所をテストの練習場と心得ていしている人もいる。テストの練習をすれば試験に合格しやすいとか、知能が高くなるというような勧めがいはいは排撃しなければならぬ。もちろんテストは一種類にかぎらずいくつか受けてみることは正確さを求める意味ではよいことであるし、また受験校と子ども能力とを比較検討してみることも必要なことであるから、相談所を訪れること自体はよいことであって、そのねらいを正しく両親が理解することが大切である。

また、入試の準備として家庭教師をやったり、補習的な知識を詰めこんだりすることがかなりおこなわれている。それが前述のようなノイローゼをひき起しさえしなければよいではないかという考え方もかなり広くおこなわれているようである。

テストの練習は背のびをして身長を計るようなものであるとしても、子どもが生存競争の第一歩で勝ちさえすれば、試験に合格しさえすればよいので、人格の調和的発達も、実力をつけることも合格してからゆつくりつけますという親がいる。つけ刃でも棒暗記でもよいから、とにかく合格しさえすれば手段はえらばないというのが親心であるとしたならば、いったいどうしたらよいかという疑問が起るのである。これに対する正しい解答がなしえないならば、幼稚園の教師は親の要求が正しくないとしてもこれを受容しなければならなくなる。

そこでもっている知能が十分発揮しうるか否かという問題を考えてみる必要が生ずるのである。が、まず実例から考察してみよう。

ある知能優秀園児がある私大の小学部を受験したが落ちてしまった。家の人が本人によく聞いてみると、へまな答ばかりしていることがわかった。たとえば、「犬の足は何本？」という質問に「二本」と答えている。その子は犬の足が四本ということはもちろん知っているが、そんな幼稚な（？）問題ではおかしいと思つて、いろいろ考えた末、兄さんが人類も昔四つんばいで歩いた時代があるが、そ

のうち二本足で歩くようになり、二本の手を使って物を作るようになったと教えてくれたことを思い出した。そこで犬でも、もし二本足で歩くようになったら、前の二本は足でなく手だろうと考えついたというのである。そこで名答と違って「二本」と答えたというわけである。

この例は、幼児に消化しきれない知識を単に詰めこんだための悲劇であるが、これに似たようなことは毎年起っているのである。子どもらしい生活の中で自然に身につけた知識は、自然に發揮されるのであるが、不自然に注文されたり、練習されたりした知識は不自然ならわれ方をするのである。

つまり、子どもの能力はおとな流の抽象的な思考力よりも、むしろ具体的な経験や遊びを通して身についたものが大切だということである。次にもう一つ大切なことは、能力は単に能力だけでなく、情緒や社会性などを含めた人格全体の機能や態度などを背景に發揮されるものだということである。オドオドしたり、緊張したりすると能力は十分發揮されないということは常識的にも明らかなことであるが、それは単に入試前のしつけ方だけでなく、長い期間のしつけ方によって知能の型が形成されるといふ事実から立証されるのである。(註)

つまり、抽象的な言語性の面の知能のほかに具体的な動作面の知能があり、両者が調和的に発達して、しかも高いことが大切なので

ある。そのような知能の型は、長期の生活経験やしつけの結果によって影響されるのであって、決して短期間では形成されえないのであるから、入試というような目標でなく、もっと長期の計画を根本から立て直す必要があるわけである。

#### 四、結 び

以上、幼児の入試において根本的に考えてみる必要のある問題を、人格の調和的発達ということと、知能という二つの観点から考察してみたのであるが、この二つの観点は実は、一つのものを両方の角度から眺めたというにすぎないものである。

幼児期の人格の発達の特質からみて、感覚・運動・情緒・社会性などの十分な発達を土台として知能が伸びるということ、したがって抽象的な知能よりも具体的な知能の伸展を考えることが自然の法則に適しているということを強調したわけである。その法則に反するようなことをしてみても、結局効果が上らないという実例をいくつかあげたわけである。

幼児心理の発達段階や個人差に応じて入試を考えるならば、「幼児の入試」はおとなの考えるものよりも、かなりちがったものにならなければならないはずである。

(註) 品川不二郎、児童の知能における人格的要因の測定に関する研究

—— WISCによる臨床的研究 ——

教育心理学研究、四巻一号